本式挙行法話

〔第一教区〕

第一教区　妙光寺住職　慈峰座元

私は在家出身で、仏縁により妙光寺に入ることが出来ました。皆さんご承知の様に、妙光寺の開山様法燈国師は無門慧開禅師の法を嗣がれ、弟子は僧堂の開山様、孫弟子には、国泰寺や向嶽寺という本山の開山様を輩出された高僧であります。私は僧堂に掛搭する前に、山岡鉄舟との御縁で、清水市にある鉄舟寺を訪れた事があります。その時は鉄舟寺の本堂が妙光寺から移築した物であるとは露知らず、今思うと御縁があったのだなあと感慨深いものがあります。

また鉄舟は国泰寺の再興に尽くされた方で、妙光寺と国泰寺ひいては鉄舟寺へと連なって行ったように思われます。本当に縁とは不思議なものです。

ところで、妙光寺は明治に入って和尚が斬殺されるという事件があり、廃仏毀釈と相俟って、村上天皇陵造営の為に土地を上納したり、本堂や山門が他所へ持っていかれたり、開山堂内貼の印金が盗難にあったりと荒廃の極に立たされました。その後は荒れるがままの状態となりました。昭和四十年から二年弱の間に大中院の先住さんの御尽力により、建物の修復が為され、また此の度管長さん住持の時には、境内の整備に取り組まれ、丁度一年前には「京の冬の旅」として拝観できる程に景観は整ってきました。この妙光寺は檀家もなく、自ずと人の出入りも殆どない所でした。地元の人も、お寺があることすら知らなかったという有様でしたが、お蔭様で今は名前も知れ渡り、人の出入りも徐々に多くなってきています。私が入寺する際の下地を造って頂き、感謝申し上げます。

矢張りお寺は人が集まり、そのお寺の歴史の重さや雰囲気に触れ、又住職と接する事により、訪れる人が心安らぎ、ひいては生きる活力を植えつけられる所でなくてはならないと思います。

これからは人との御縁を大切にし、様々な意見に耳を傾けてゆきたいと思います。それが自然とお寺を盛り立ててゆく事なると思います。

思えば最近あった出来事です。ある年配の御婦人が訪ねて来られました。色々と接待し、境内を案内している時に、その方は「何故か涙が出てくるわ。懐かしい様なこれはなんやろ。」と言いながら、ハンカチで涙を拭っていました。その時、私は伊勢神宮を参詣された時に西行が詠まれたという「何事のおわしますかは知らねども恐なさに泪こぼるる」という歌を想い起こしました。西行は神宮の持つ崇高さや神秘性に触れ、思わず知らず涙がこぼれてしまったのでしょう。この御婦人もお寺の持つ雰囲気や情緒を肌で感じ、感極まる処があったのだと思います。殊に、この妙光寺は野放図の状態になっていた為、幸か不幸か素朴な風情、野趣味、雅趣味という様なものが残っています。こういう自ずから為るもの、即ち自然を大切にし、守るべきものは守ってゆかなければと思いました。これには後日談がありまして、その御婦人は後に夫と友人を連れて来られたのです。この様に人伝に広まり、お参りに来られた方々が口々に「好かった」「感動した」「目から鱗が落ちた」「京都は奥深い」等々喜んで帰ってゆかれるのを見るのは、私も嬉しい限りです。それと又、開山様の御縁で、この寺には本朝普化古道場掛籍票が掲げられてありました。終戦直後迄、尺八の道場として立っていたのですが、それが途絶えてしまい、それを知る人さえ稀な状態となりました。しかしこれも機縁があり、現在「妙光会」と称して尺八の会が出来ています。妙光寺発起人の人達は妙光寺の為、捨て石となり礎となってゆきたいという熱い思いで精力的に活動しています。本当に有難い事です。これ等様々な人達のお力添えを受け、この妙光寺の繁栄と地元の方々と親密につながり、御縁を結んでゆきたいと思います。

香語

厳寒徹骨現清魂
今日親登正覚門
拝塔高懸真宗旨
薫香直吐却乾坤

建仁寺派宗報　第69号

平成22年8月1日発行